

回回回回回回 中國のむかしばなし 回回回回回回回回回回

『なまけもののおかみやん』

— 烙餅師傅和懶妻 —

近藤 伊津子・編

も美しく、ほんとに蘭の花^{らんのはな}のようでした。

むかし、あるところにお好み焼屋の主人が、いました。主人は商売に熱心のあまり、おかみさんを貰うひまもなく、ずいぶん年をとつてから、やつと、おかみさんを貰いました。主人は、そのおかみさんを「蘭花^{ララン}」と呼び、とてもかわいがりました。

おかみさんは、ほつそりとしていて、とてもしませんでしたし、猫が台所の魚を取つて

も立ち上がりませんでした。

おかみさんは、もちろん洗いものもしませんので、主人は、小麦粉をこねては、洗いものをして、「蘭花」や、おまえは、つかれてはいけないよ」とやさしく言うのでした。

おかみさんは、ごはんの支度も、もちろんしませんでしたが、主人は「かわいい蘭花や、ごはんのかわりに、お好み焼きを食べればよい、お前の手を黒くさせないよ」と、天にもささげんばかりにやさしく言いました。

万事こんな調子でしたので、おかみさんはすっかり団子に乗り、寝台で横になつてばかりいました。もちろん家の中は、もう、めちゃくちゃになつてしましました。

主人は商売も忘れ、おかみさんの世話を明け暮れていきました。

このようなありさまを見ていた主人の母親は、なまけものの嫁と、馬鹿な息子に愛想もつき、こんなところには住めないと、家を出て、娘のところに行つてしましました。

姑がいなくなると、おかみさんは一層、安心して、あれこれ食べものばかり欲しがり、主人は蘭花の欲しがるものはなんでも買いに走りまわり、とうとう、おかみさんの寝台のまわりは、食べものが小山のように、うず高くつまれ、はしのようほつそりしていたおかみさんは、どんどん太り、太鼓のようになりました。

やがて、もうどうにも、おはなしにならないほどふとつたおかみさんは、寝台から起き上がるこども出来なくなり、朝も昼も晩も、寝たままになつて、腰も背中も痛くなり、「あーよ、あーよ」と泣きました。それを見

て、主人は「ああ、かわいそうな蘭花や、病氣にならないでおくれ」と言つたものです。

一日中、足が痛いといつては泣き、主人が足をさすると「ファン！ 背中が痛いのよ！」、そこで主人は背中をさすつてやるという具合でした。

ごはんを食べる時は、お茶わんを手に持つのもいやになつてしましました。主人は「かわいい蘭花や、私が口に入れてあげるから、いいよいよ」と言いました。おかみさんは、ただ、ただ食べて寝て、寝て食べてばかりいました。

そのうち、声を出すのも、目を開けているのもいやになりました。

人は、おまえさんのことを思い悪い、病氣になつてしまつた。見舞いに来てほしいと頼まれたよ」と言いました。主人は、それを聞くと、矢も楯もたまらなく、おつかさんに会いたくなりました。

けれども、留守中の、おかみさんの世話のことが気がかりで、途方にくれてしましました。

主人はおかみさんの耳に口を寄せて「かわいい蘭花や、どうしたらよからうね」と言いましたが、おかみさんは返事もしませんでした。考えた末、仕方なく、隣のおかみさんに頼んでみましたが、「なまけものの世話なんぞまっぴらだね」と断られてしましました。主人は、ますますおつかさんの病氣のことと、おかみさんのことが心配で、頭をかかえこんでいましたが、ふと、いい思いつきが

浮かびました。

主人は、小麦粉をこねて、いろいろ工夫し

首のまわりを回すこともしないで、飢死して
いました。

(かつこう文庫主宰)

て、二十斤ほどもある大きな丸いお好み焼きを作り、真中に穴を開け、おかみさんの頭を

通して、首にかけてやりました。

この大仕事を仕終えた主人は、やっと落ち

着いて、「かわいい蘭花や、このお好み焼き

は、十日間分はあるからね、大丈夫だよ。わたしはすぐに帰って来るから…」と、おかみさん

さんの耳に口をつけて言つてきかせました。

それから、主人は安心して旅立ちました。

主人のおっかさんは、息子の顔を一目見ただけで、すっかり病気も治りましたので、主人

は大急ぎで、帰つきました。

けれども、そのかいもなく、おかみさんは、とうに、寝台に寝たまま、お好み焼きも、ただ口の前のところだけ食べたりで、

(注) 烙餅ろうべい＝小麦粉をこねて、厚焼にしたもの

一斤＝六〇〇g 二十斤＝十二kg

